

Stephanie Moreno

LAIB 4000

Kumiko Saito

Internship Report

インターンシップ報告書

2024年の夏、私は JP モルガン・チェース（JP Morgan Chase & Co.）でインターンシップを行いました。場所はデラウェア州ウィルミントンにあり、Chase Leadership Development Program（CLDP）というプログラムでサマーアナリストとして参加しました。JP モルガン・チェースはとても大きな会社で、投資銀行部門や消費者向け銀行部門など、さまざまな分野があります。私のプログラムは消費者向け銀行、つまり「Chase」で行われたので、私は主に Chase の業務に関わりました。

このインターンシップは給与が支払われるフルタイムの仕事で、期間は 9 週間でした。私はデラウェアに住んでおらず、家族もいないため、このオファーを受けるかどうかはとても悩みました。私の出身はサウスカロライナ州であり、デラウェアはかなり遠い場所です。ありがたいことに、会社は引っ越し費用をサポートする「スティペンド（stipend）」を支給してくれました。スティペンドとは、キャリアトレーニングを受けている人の生活費をサポートするための特別な補助金のようなものです。

私はこのインターンシップが貴重な機会であることを知っていたので、両親を説得しなければなりませんでした。JP モルガン・チェースはアメリカで一番大きな銀行であり、これは「コーポレート・アメリカ」の世界に入るための大きな第一歩だと思いました。正直に言うと、最初は銀行で働きたいとは思っていませんでしたが、人とのつながりを作るためにはとても良い場所だと感じました。そして結果的に、この仕事に対して情熱を持つようになりました。

た。このインターンシップは私にとって本当に貴重な経験であり、感謝の気持ちでいっぱいです。

企業紹介

JPMorgan Chase & Co. (JP モルガン・チェース) は、アメリカ合衆国に本社を置く世界有数の金融サービス会社です。投資銀行業務、資産運用、商業銀行、リスク管理など、幅広い金融サービスをグローバルに展開しています。従業員数は約 25 万人以上にのぼり、100 以上の国と地域で事業を展開しています。2000 年に JP モルガンとチェース・マンハッタン銀行が合併して誕生し、その後も複数の合併を経て、現在の形となりました。企業理念として「顧客第一」「責任ある銀行業務」「多様性とインクルージョンの推進」などを掲げており、持続可能な社会の実現にも注力しています。

業務内容

私のポジションの正式なタイトルは「サマー・アナリスト」でした。公式の仕事内容は、データ分析やモデルを使って業務の効果を測定したり、新しいデジタル機能の開発、プロジェクトマネジメント、マーケティングやメディアのイニシアチブ、またはビジネス戦略の評価などを行うことに加え、会社の規則を遵守し、プロジェクトや業務の進行を適切に管理することも含まれていました。

多くのプロジェクトは、ビジネスの成長やカスタマーサービスの改善を目標とします。たとえば SNS のデータを分析して新しいプロダクトのマーケティング戦略を考えたりすることもあります。

インターンシップでは、ファイナンス、データアナリスト、マネジメント、戦略、オペレーションなど、さまざまな分野から配属先を選ぶことができました。私は数学が得意ではないため、ファイナンスは自分に合わないと感じましたが、過去の経験から戦略系の役割により興味を持ちました。最終的に、ビジネスバンキング部門に配属され、そこでの業務を通じて戦略的な視点を深めることができました。

ビジネスバンキングの中にもさまざまな役割がありますが、私は戦略的な業務に関わりたいという希望を伝えました。その結果、「スモールビジネスバンキング」の「スモールドラローン・プロダクト戦略チーム」に配属されました。

インターンの間、「ストラテジスト（戦略担当）」として全部で5つのプロジェクトに取り組みました。インターンの間、「ストラテジスト（戦略担当）」として、全部で5つのプロジェクトに取り組みました。たとえば、15万件以上の顧客アカウントを管理するダッシュボードの再設計戦略の立案、融資却下率に関する40以上の要因の分析と改善策の提案、7社の競合他社の調査および13項目の主要指標のベンチマーク作成、初の競合インテリジェンス資料の作成支援など、実践的な業務を経験しました。自分が作成したレポートの一部は、ビジネスバンキング部門のCEOにも共有されました。とても実践的な内容で、自分の作ったレポートの一部が、ビジネスバンキングのCEOにも読まれました。

私の仕事の大きな部分は、エクセルを使ってデータを分析し、トレンドを見つけたり、データ&アナリティクスチームと連携して課題を発見し、解決策を考えることでした。

実は、私はなぜこの仕事に応募したのか、あまり覚えていません。2023年の夏、私はテキサス州サンアントニオで行われたコンベンションに参加しました。このイベントには何千人もの学生と、何百社もの大企業が参加していて、ネットワーキングをしたり、仕事のチャン

スもらえる場所でした。私はとにかくどこでもいいから面接の機会をもらえるように、たくさんさんの企業に応募していました。

そのため、CLDPに応募したこともすっかり忘れていました。でも後で、JP モルガン・チェースとの面接が決まったというメールを受け取りました。

その時の私は、JP モルガン・チェースがどんな会社なのかよく知りませんでした。アメリカで一番大きな銀行だということも、有名な会社だということも、その時はまだ知らなかったのです。友だちに話すと、みんなとても驚いて、「すごい!」とか「うらやましい!」と言ってくれました。

当時の私はコンサルティング業界に興味があって、Deloitte や RSM、EY などの会社しか知りませんでした。そして、JP モルガン・チェースがどれほど大きな会社かを知ったのは、面接が終わってからのことでした。

分析

これから、このレポートでは、私のポジションや仕事内容、職場で感じたカルチャーショック、そして全体的な経験について詳しく述べます。また、シェースのビジネス文化と日本のビジネス文化を比較し、その文化的な違いが私にどのような学びを与えたのかについても説明します。

私が最初に感じたカルチャーショックは、Chase（JP モルガン・チェース・アンド・カンパニー。）の職場の雰囲気がとてもリラックスしていたことです。オファーを受けた時、私は「厳しい」アメリカの企業文化に自分がついていけるか心配しました。JP モルガン・チェース・アンド・カンパニー はアメリカで最も歴史のある銀行のひとつで、昔ながらの企業文化

が強く、仕事もとても真面目で厳しいと聞いていました。正直、自分の上司やチームに対して恐怖心を抱くのではないかと考えていました。

しかし、実際に働いてみると、全く逆でした。私のチームはとてもオープンで、気さくに話してくれました。チームリーダーは「マネージングディレクター」というとても高いポジションにいる人ですが、最初に会ったとき、「BBQを食べながら大学生活について話そう」と言ってくれて、驚きました。リーダーが率先して話しやすい職場の雰囲気を作っていることがうかがえました。さらに、ビジネスバンキングのCEOとも一対一で会う機会がありましたが、そのときもとても親切で、フレンドリーな雰囲気でした。

工作中、最初は「マム」や「サー」といった敬語的な表現を使うことが期待されるのかなと感じましたが、実際にはそのような要求はなく、リラックスした雰囲気で会話ができました。このようなフレンドリーな雰囲気は、特に南部でよく使われる敬語表現を普段使っている私には新鮮で、少し驚きました。また、上司や同僚がフレンドリーに接してくれることで、よりオープンで効率的なコミュニケーションが生まれ、業務にも良い影響を与えていると感じました。

日本の職場文化と比べてみると、その違いはとても大きいです。日本では職場の上下関係がはっきりしていて、形式的な言葉づかいや礼儀がとても大切です。さらに、シェースには「報連相」という文化が根付いており、情報の共有や報告、連絡が重要視されています。

「報連相」は、「報告（ほうこく）・連絡（れんらく）・相談（そうだん）」の略です。これは日本の会社で働く時にとても大切にされる考え方です。

- ・報告：上司に進捗や結果をこまめに伝えること。

- ・連絡：関係者に必要な情報を共有し、ミスや誤解を防ぐこと。
- ・相談：一人で決めずに、問題や悩みを上司や同僚に相談すること。

この「報連相」を守ることで、チーム全体がうまく連携し、問題が大きくなる前に対処することができると考えられています。

一方、アメリカではもっと「個人の判断」や「自由な働き方」が尊重されており、自分のペースで仕事を進めることも多いと感じました。JP モルガン・チェース・アンド・カンパニーの働き方はこのハウ・レン・ソウとはかなり違っていました。私の職場では「トップダウン型」の働き方が基本でした。つまり、すべてのプロジェクトやタスクは上のポジション（マネージャーやディレクターなど）から始まり、チームの中を段階的に下へ流れていくスタイルです。私のようなインターンにも、上からの指示がそのまま伝えられて、それに基づいて動くということが多かったです。自分で相談して進めるというよりも、「決まったことを正しく実行する」ことが求められていました。この違いに最初は少し戸惑いましたが、逆に言えば「信頼されて任されている」とも感じられ、とてもおもしろい体験になりました。

このような「トップダウン」の文化では、責任や指示が明確であるため、行動に迷いが少なく効率的ですが、日本のように細かく相談したり報告したりする文化とは異なり、指示が一方的に伝えられるため、意思決定が迅速に行われます。両者はどちらも効率性とより良い管理を目指していますが、そのアプローチは異なります。

私が直面した課題のひとつは、自分の中にある「インポスター症候群」でした。

JP モルガン・チェース・アンド・カンパニーは全体的には多様性を重視している企業ですが、私が配属されたインターングループ内ではあまり多様性が感じられず、少数派であること

を強く意識する場面がありました。実際、私を含めてマイノリティのインターンはたった 3 人しかいませんでした。

そのため、時々「自分はここにいるべきではないのではないか」と感じることもありました。特に私はビジネスの強いバックグラウンドを持っていなかったため、「自分はこのインターンにふさわしくない」と思うてしまうこともありました。

それでも私は、一生懸命に努力を重ねました。私のチームメンバーはとても親切で、わからないことがあっても「できない人」扱いをされることは一度もありませんでした。むしろ、質問すれば丁寧に教えてくれて、「学びたい」という気持ちを尊重してくれました。

私は与えられた業務だけでなく、それ以外の分野についても自主的に学ぶように努めました。たとえ現在のプロジェクトに直接関係のないことでも、知識を深めることで自分に自信をつけたかったのです。

-このような経験を通して、私は「自分はここにいる価値がある」と少しずつ思えるようになりました。

結論

私にとって、JP モルガン・チェース・アンド・カンパニーでのインターンシップは非常に素晴らしい経験でした。最初は新しい環境に馴染むことや、自分が本当にこの仕事に向いているのかに対して不安に感じていましたが、インターンシップを通して、私は多くの成長を遂げることができました。

まず、私はこのインターンシップに全力で取り組みました。与えられた課題をこなし、データ分析や戦略の立案など、さまざまな業務を積極的に学び、成果を上げることができました。自分自身を課題に向かって挑戦させ、ビジネスの世界で必要なスキルや知識を身につけることができました。また、チームのサポートと親切的な指導のおかげで、自分の成長を実感できました。私のレポートがビジネスバンキングの **CEO** に直接届けられる機会もあり、これは大きな自信となりました。

特に印象に残っているのは、私がインターンシップ期間中に経験したチームワークと学びの深さです。チームのメンバーと共に働くことで、個々のアイデアや意見を尊重し合いながらも、全員が一丸となって目標に向かって進むという貴重な経験を得ることができました。自分が持っている知識とスキルを最大限に活用し、また新しいスキルを身につけることで、インターンシップが終わる頃には大きな自信を持てるようになりました。

そして、この努力が実を結び、**JP** モルガン・チェース・アンド・カンパニーからフルタイムのオファーを頂くことができました。このことは、私にとって非常に嬉しい結果であり、このインターンシップを通じて得た経験や成長が、将来のキャリアに大きく貢献するだろうと確信しています。